

- 1 射水市立大島小学校教諭 筏井朋美
- 2 みちしば特集号 生きる力といのちと死 2006年3月30日発行
富山・いのちの教育研究会 第35回定例会で発表 2006年2月4日
- 3 「みんなでザリガニを育てよう」
- 4 3年生の子供たちが、ザリガニを飼育する中で、小さな生き物に一生懸命にかかわり小さな生き物にもいのちがあることを感じていった実践である。
一生懸命に育てているのに訪れる死や懸命に生きようと命がけで脱皮をするザリガニ。池で育てると天敵にねらわれる自然の厳しさ。子供たちは、ザリガニという小さな命を守ろうと懸命に取り組んだ。その中で子供たちは、命を感じ命について考えていった。
- 5 『 みんなでザリガニを育てよう ー小さいいのちに心を寄せて-- 』
はじめに
今日は、今年度3年生の子どもたちと一緒に取り組んだささやかな実践を発表させていただく。
4月に3年生の子どもたちと出会って、この1年間で何か一つ、子どもたちと一緒に取り組みたいと考えた。そして「いのち」について私自身もわからないがとても大切なテーマを子どもたちと一緒に考えたり悩んだり学んだりしていきたいと考えた。
どうやっていのちを学んでいけばいいのかということを考えたときに、いのちあるものに直接触れること、そしていのちを感じることに、そのことなしでは進めないのではな
いかと考えた。そのためには子どもたちが一生懸命に夢中でかかわることが重要である
と思った。そのことによってこそ、いのちを大切に感じる事が出来ると思った。
そこで総合的な学習の時間に身近な生き物を飼育し、小さな生き物を守り大切にしようとする気持ちを育てたいと考えた。そして地域の川にすむ小さな生き物であるザリガニを育てることにした。ザリガニは大きなはさみを持ち、子どもには魅力がある。また、飼育するのに特別な設備は必要なく、育てやすく観察もしやすい。また、近くの川の中に生息しているので身近である反面、それが身近にいることを知らないこと、さらに3年生の子どもたちが夢中になる大好きな生き物であること、などの点から飼育する対象として選んだ。
子ども本来の持っている、自然や自然の生き物と触れ合うことが大好きだという気持ちを十分に受け止め、生き物と繰り返しかかわり、体全体で活動し、小さな生き物も一生懸命に生きているということを知ってほしいと思った。また思いやりの心を持ち、自分で出来ることを実行していくという子どもの姿を期待した。そしてこのことがやがて自分や友達、周りの人を大切にすることに繋がっていくと考えた。

実践のあらまし

(1) 出会い

次に実践のあらましについてお話しする。春に一匹のザリガニを見つけたと一人の子どもがやってきた。子ども達はどこで見つけたかとか、どうして捕まえたかなどと興味津々であった。そこで学校や家の近くにもザリガニがいるのかなと言葉をなげかけるとザリガニ探しが始まった。公園の裏にいるよとか後ろの川にいたよ、などたくさんの情報が集まり、少しずつ教室にザリガニが集まった。自分の家にこんなに近くにザリガニがいるなんてびっくりした、などと話しながら図書室で飼いかたを調べ、可愛いねといいながら観察をしていた。

(2) どうして死ぬの

ところがある朝、登校するとザリガニが共食いをしていた。バラバラになったザリガニを見て子どもたちは驚き、口々に可愛そう、どうしてだろう、ザリガニさん、痛かっただろうね、と話し合った。そして8個の水槽に、共食いを防ぐために身体の大きさごとに分けて入れ、隠れ家を入れて、餌を十分に与えて飼うことに決めた。ところが次の日また、たくさんのザリガニが死んでいた。これでもう大丈夫と思っていた子どもたちはショックを受け、教室は静かになった。

もう二度と死なせたくはない、もっとしっかり飼い方を調べたい、と改めて世話の仕方を図書で調べたり、詳しい人に聞いたりした。30センチくらい水槽には二匹くらいしか入れられないことや、温度が高すぎると酸素不足になること、水面に上がって酸素補給しやすいように、水の量を少なめにするなどを知った。子ども達は生き物は正しい飼い方をしないと死んでしまうことを知った。ある子どもはノートに次のように書いた。

「ザリガニさんは痛かったと思う、怖かったと思う。二度と死なせたくない、もっとちゃんと育て方を調べる。」生きているのが当たり前と思っていたザリガニがある時、突然死んでいくのを見て、子ども達はもっと正しい飼い方を調べ、飼わなくてはならないと感じ、これまでに以上に真剣にかかわるようになった。

(3) もっと広いところに入れてあげたい

そんなある日、I児が「もっと広いところで飼ってあげたい。だって、狭くてきゅうくつそう。」と提案した。子供たちはみんな、ザリガニの池を作ろうと張り切った。校舎の裏側に作ることに、みんなで穴を掘って水を入れて作ることを決めた。そして子供たちはスコップを持って穴を掘り、池を作り始めた。

(4) せっかく脱皮したのに

池を掘っている最中に水槽の中のザリガニが脱皮をした。ところが上手く脱皮が出来ず、皮が身体に付いたまま死んでしまった。「ザリガニは上手く脱皮できないと死んでしまうんだ。ザリガニは命がけで脱皮をするんだ」と子どもたちは話した。「脱皮した後は身体が柔らかいから、触ったりしたら死んでしまう。脱皮が上手くできるためには

砂をたくさん入れてやらなければいけないよ。」と調べたことを話す友達にみんな真剣に耳を傾けていた。

(5) 今度は成功

次に脱皮したザリガニは上手く脱皮することができた。ハサミからシッポまで綺麗に脱皮したザリガニに子どもたちは感心していた。「疲れてじっとしているね。」「脱皮した後は疲れているから心配だね。」「ザリガニは自分の脱いだ皮を食べるので皮はそのままにして置くと書いてあったよ。」「今度はもう死なないでね。」「ザリガニの一生懸命生きる姿に心を寄せる子どもたちだった。

R 児の作文。「今日、私のザリガニが脱皮しました。はつだっぴです。私はうれしくて先生に言いに行きました。脱皮の後は身体が弱るから心配です。明日、元気が、学校へ来るのがドキドキします。もし、死んでいたらすごく悲しいです。」

(6) わたしは池に入れたくない

九月上旬、ようやく池が出来上がった。子どもたちは水槽での飼育経験を生かして、「隠れ家があるよ。」「草も入れよう。」「脱皮できるように砂も入れよう。」と活動をはじめた。そして池が完成し多くの子ども達がザリガニを池の中にいれた。「広くて気持ちよさそうだった。」「泳ぐのが速くて元気だった。」「自分の隠れ家を探していたよ」と口々に子どもたちは話した。

その中で、H児は「池に私は心配で入れたくない。」と言った。「オスとメスと結婚して赤ちゃんをませたい。」と話した。それに対して「でも、広い方が嬉しいんじゃない?」「自由に好きな相手を見つけて結婚した方が嬉しいと思う。」と発言する子どももいた。じっと発言する子どもの話をH児は聞いていたが、水槽で飼い続けることを選んだ。

(7) 池にザリガニがない!

子どもたちは毎日のように出来上がったザリガニの池へ足を運んでいた。ある朝、出勤してきた私に、子どもたちが「ザリガニがない」と大慌てで言いに来た。みんなでくまなく池の中を探したが、やはり3匹いなくなっていた。どうしてだろうと話し合い「カラスに食べられたのかな。」「猫かな」「逃げ出したのかな」「誰かが持っていったのかな」と予想を立て、「ザリガニのいのちを守ろう大作戦」として活動を始めた。Y児は次のように書いた。「ザリガニは僕たちとは違うけど同じに命がある。だからザリガニはずっと生きてほしいと思う。僕はザリガニの命を守りたい。」

子供たちは、逃げ出さないように周りに流木を並べたり柵をしたりした。猫やカラスの撃退法については図書やインターネットで調べたり、家の人に聞いたりして、カカシを立てたり、網を張ったり、猫の嫌いな匂いの草を植えたりした。また、ザリガニの池を紹介するビデオを作成し、校内放送で流した。そうして改良した池に、もう一度ザリガニを放した。

(8) 死んだら、悲しいよ

池の改良が済んでもN児はまだ水槽で飼っていた。ところが10月のはじめにN児のザリガニが水槽で死んだ。結婚して赤ちゃんを産んでほしいとって世話をしていたN児は、とても悲しんだ。一緒に世話をしていたK児と動かなくなったザリガニを見つめながら、「昨日まで元気だったのに。わたし一日だけ、水替えしなかった。帰りに水を買えば良かった。」とつぶやいた。「今の気持ちをノートに書いてごらん。」と言うとN児は次のように書いた。

「私のザリガニはオスとメスで可愛くて元気でした。オスがザニたろうでメスがフラワーでした。初めて友達と飼えるので嬉しかったです。毎日学校に行き餌をやったり見たりするのが楽しくて学校が好きになりました。二人はけんかもしなくて、なかよく一緒にかくれ家に入っていました。けっこんしてたまごを産んでほしかった。わたしはザリガニのために砂やかかくれ家をいれたり、水くさを入れたりメンバーで工夫をして、水槽の中は海みたいになりました。わたしは今まで頑張ってザリガニを育てたよ!!」

そしてN児は池のそばにきれいなお墓を作った。ここなら、ともだちがたくさんいて寂しくないからと言いながら。

純粋に小さな生き物に愛情を持ち、かわいがっていたという子どもの気持ちを知り、わたしは胸が熱くなった。出来れば産卵させる経験を、と思っていたのでわたしも残念に思った。しかし、私たちは、子どものころから小さな死を多く体験する中で、漠然とそして丸ごとに命というものを感じていくのではないだろうかと思った。また、死を、このような悲しみを持って感じ取ったことは、貴重なことにも思えた。

(9) 寒くなってきたよ

11月、木枯らしが吹き始め、冬が近づいてきた。「池のザリガニは寒いだろうな。このままでは死んでしまう。どうしてあげたらいいだろう。」と話し合った。「水槽に戻して部屋に入れてあげたらいい。」このあいだ見た溝のザリガニは泥のダンゴになって穴にもぐっていたよ。「でも、今池にある泥はダンゴにならないから」と話し合い、水槽に学校田の泥を入れて、越冬させることにした。

次の日、泥の中に穴を掘って深く体を埋めているザリガニに子供たちは「すごい！自分の家を作った。」と感心しながら見ていた。

12月、順調に泥の中にもぐって冬眠しているザリガニもいるが、潜らないザリガニも数匹いた。そして潜らなかったN児のザリガニが死んでしまった。潜らないザリガニをそのままにして、冬休みを迎えていいのだろうか話し合った。落ち葉を増やしたらどうだろうか、土を柔らかくしたらどうだろうか話し合っていると、M児が突然、「もう放したほうがいい」と話し始めた。M児は「ザリガニは本当は3年生きられるのに、私たちは何匹も半年くらいで死なせてしまった。ザリガニだって生きたいのに。もし川にいたら生きられたかもしれないのに」と話した。それに続いてS児が「ザリガニにも家族がいるからかえりたいとおもっていると思う。川の中のザリガニは家族と一緒に冬

眠しているよ」と発言した。何人かの子供がこの発言に心を動かされ、「ザリガニは、本当は人間が怖いんじゃないか。いつか死ぬのなら、ふるさどで死んだ方が幸せだと思う。」と発言した。

M 児の作文を紹介する。「ザリガニは何のために生まれてきたんですか。なぜ子供のときで一生を終えるんですか。なぜ人間に一生を支配されねばならないんですか。ザリガニだって平和になりたいんです。ザリガニだって気持ちがあるんです。わたしがザリガニだったら教室で死ぬより自然の中で死んだ方がいいんです。つみもないちいさなちいさな命です。その命をなんのためにうばうんですか。・・・」これに対して、子どもたちはこんな雪の中で放したら死んでしまうよ。」「いま、放したら今までやってきたことがむだになる。」「ザリガニと別れたら、私は悲しい。」「最後まで責任を持って世話をしなければいけないと思う。」と発言した。I 児は次のように書いた。「よく考えようとか、よく調べようというのは、ずっとしていかなければならないと思います。がんばって「課題」をやった後は「達成感」を浴びるんです・・・。「総合的な学習」はただザリガニを育てるのではなく、がんばってよく調べて努力して、最後はやった、と思い、よく勉強になると思います。僕は責任を持って育てるぞ!」

次にH児の作文。「僕は「いま本当に逃がしてもいいのか。」という気持ちです。今逃がしたらザリガニは外の温度が冷たくて死んでしまうのではないのかと思います。僕は今逃がしてはいけないと思います。」

放したほうが良いと話したM児の発言は自分自身が一生懸命にザリガニにかかわったからこそもった気持ちだった。この発言によって他の子どもたちはザリガニの気持ちを考えて責任を持って最後まで世話をしなくてははいけないという気持ちを強くすることができた。

(10) おわりに

いま、ザリガニは水槽の泥の中で冬眠をしている。春になって冬眠から無事に覚め、再会できる日を子どもたちと一緒に待っている。子どもたちは約一年間、ザリガニを飼い続けた。えさを食べる姿に愛情を感じ、命がけの脱皮を喜び、共に楽しみ悲しむ経験をすることができた。もしザリガニを飼うという活動をしなかったら、これほどまでに熱中して生き物にかかわったり、命を感じたりすることはできなかったと思う。

また、クラスみんなで飼う、仲間がいる、そのことによって喜びも悲しみも2倍、3倍になっていったと感じる。そしてもっと大切なことは、子どもたちが小さな命を守ろうと一生懸命に考えかかわったということである。このことで小さな生き物にも命があり一生懸命に生きているということを感じることができたと思う。調べること、考えること、かかわること、この繰り返しの中で、愛情が深まり、小さなどこにでもいるザリガニが、かけがえのない命ある存在として子どもたちの心の中に入り込んだと思った。小さな命もそのかかわりの深さで存在は大きくなり、子どもの心を動かすと感じた。以上です。

(完)